

2021年7月8日

MURC Focus

9月のドイツ総選挙展望

～注目される CDU と緑の党の力学関係

調査部 副主任研究員 土田 陽介

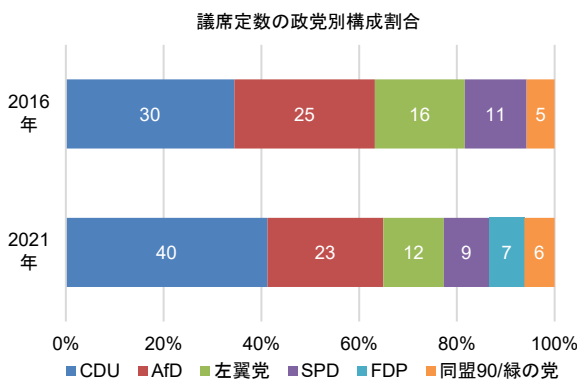
- 9月26日日曜日、ドイツで総選挙が行われる。現状の支持率を確認すると、CDU/CSU が30%強、同盟90/緑の党が20%弱。事態は流動的であるが、次期の連立協議が両党を軸に行われるだろう。
- 組閣協議は難航が予想され、年明け以降にまでずれ込む展開が視野に入る。今回の総選挙で4期16年を率いたメルケル首相が退任するが、メルケル後のドイツ政治は不安定な船出を余儀なくされる可能性が高い。
- 4期にわたるメルケル CDU/CSU 政権で安定してきたドイツ政治も、時代が下るごとに多党化の流れを余儀なくされてきた。9月の総選挙ではその傾向がより明確な形で現出することになるだろう。

(1) ザクセン・アンハルト州議会選は CDU が善戦

9月26日日曜日、ドイツ連邦議会（下院）で総選挙が行われる。その前哨戦に位置付けられる州議会選挙が6月6日、東部のザクセン・アンハルト州で実施された（定数97議席）。メルケル首相の率いる与党キリスト教民主同盟（CDU）は、事前の予想だと第二党である民族主義政党「ドイツのための選択肢（AfD）」に押され、苦戦を強いられるとの見方が有力だった。

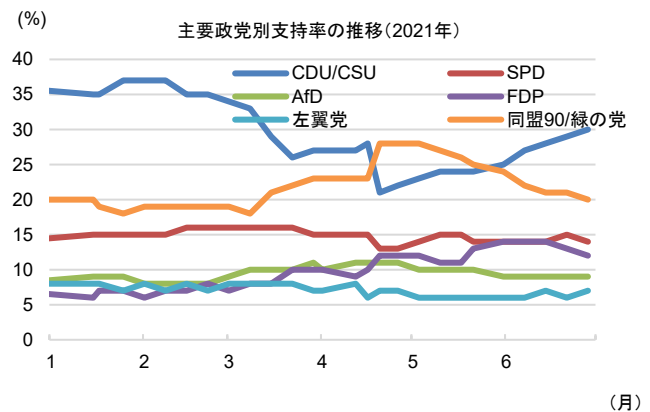
とはいえ蓋を開けると、CDU は前回から10議席を積み増して40議席を獲得、第一党の座を死守した（図表1）。一方、ドイツ東部を地盤とする AfD は2議席を失い、23議席の獲得に留まった。動向が注目される環境政党「同盟90/緑の党」は議席を1つ増やしたが、6議席であった。ドイツ西部では支持を集める同盟90/緑の党だが、ドイツ東部での苦戦が改めて明らかになった。

図表1. ザクセン・アンハルト州議会選の結果



(出所)選挙管理委員会

図表2. 失速が明らかな同盟90/緑の党



(出所)Forsa

(月)

3月にドイツ西部のバーデン＝ヴュルテンベルク州とラインラント＝プファルツ州で実施された州議会選挙では、いずれも CDU が敗北、代わって同盟90/緑の党が躍進した。同盟90/緑の党の支持率も一時 CDU/CSU (CSU はバイエルン州を地盤とする CDU の姉妹政党であるキリスト教社会同盟) に近接したが、足元では失速が明らかとなっている (図表2)。

同盟90/緑の党が失速した理由は、同党の共同党首を務めるベアボック氏に様々な疑惑が生じていることにあると考えられる。同党の首相候補であるベアボック氏に関しては春以降、党助成金の申告漏れや学歴の詐称、著作の盗用疑惑が次々と浮上。こうした醜聞に対して有権者の風当たりは強まっており、結果的に CDU/CSU の復調を招いた模様である。

さらに選挙戦が近づくにつれて、責任政党としての実績に富んだ CDU/CSU に対する期待が有権者の間で高まっていることがあると考えられる。同盟90/緑の党に対する支持の高まりは構造的な性格 (有権者間で広がる環境意識の高まりや中道左派である社会民主党 (SPD) への失望) を持つが、一方でその実績の乏しさを有権者が冷静に評価し直している可能性が窺える。

(2) 注目される連立新政権の組み合わせ

現状の支持率を確認すると、CDU/CSU が30%強、同盟90/緑の党が20%弱であり、この両党で概ね過半数となる。総選挙までまだ2ヶ月あるため事態は流動的であるが、次期の連立協議が両党を軸に行われることはまず間違いないだろう。しかし同盟90/緑の党の失速により、一時期有力視された①左派連立 (同盟90/緑の党、SPD、左翼党による連立) は考え難くなった。

現状有力視される組み合わせは②CDU/CSU と同盟90/緑の党の連立 (両党のシンボルカラーより「黒緑連立」) である。しかし両者の政策理念は噛み合わないことが多く、例えば国策であるロシアとのパイプライン計画 (ノルドストリーム2) に関する対立などは、その端的な例となる。責任政党としての実績に乏しい同盟90/緑の党の場合、その過激な主張で政権運営が混乱する可能性が懸念される。

さらに③同盟90/緑の党、自由民主党 (FDP)、SPD による連立 (三党のシンボルカラーより「信号連立」) という組み合わせが考えられるが、この場合も左派色が強い同盟90/緑の党及び SPD と、自由主義を重んじる FDP との間で対立が生じる公算が大きい。「大きな政府」志向が強い同盟90/緑の党と「小さな政府」を重視する FDP は文字通り「水と油」であり、交わりようがない組み合わせとなる。

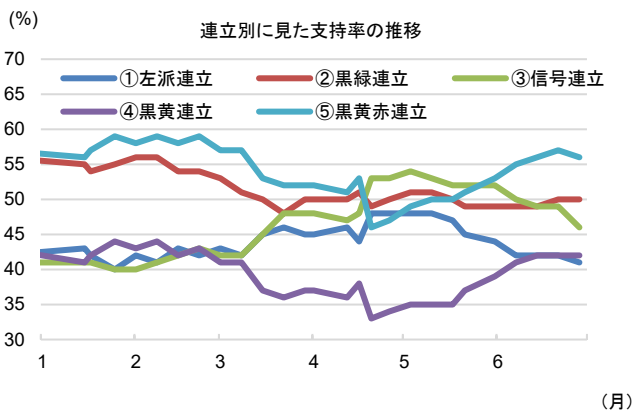
こうした中で、④CDU/CSU と FDP (同様に「黒黄連立」) という組み合わせにも現実味が帯びてきている。CDU/CSU はもともと中道右派であり、産業界との関係を重視するという点で、

規制緩和など自由化政策を重視する FDP と親和性が高い。今後、CDU/CSU と FDP の支持率がさらに回復して行けば、この組み合わせによる連立政権は十分視野に入ってくる。

この④の連立に SPD が合流する可能性も考えられる (⑤黒黄赤連立)。党勢の退潮が著しい SPD だが、①の左派連立による組閣が見通し難い中、下野したところで党勢の復調が図られるか定かではない。そうであるならば、政権与党として政権運営に影響力を行使することを重視し、黄黒連立に合流する選択肢を取ることも、現実的な選択肢となるだろう。

いずれにせよ、組閣協議は難航が予想される。場合によっては、組閣協議が年明け以降にまでずれ込む展開が視野に入る。今回の総選挙で4期16年を率いたメルケル首相が退任するが、後継候補のラシェット党首が新首相に就任しようと、あるいは同盟90/緑の党のベアボック共同党首が新首相に就任しようと、メルケル後のドイツ政治は不安定な船出を余儀なくされる可能性が高い。

図表3. 主に考えられる連立のパターン



(出所) Forsa 調査より作成

図表4. 各連立パターンの特徴

①左派連立	同盟90/緑の党、SPD、左翼党による連立。中道左派 SPD は政権与党としての経験が豊富である一方、同党以外の2党はその経験に乏しく、極左的。
②黒緑連立	CDU/CSU と同盟90/緑の党の連立。産業界を重視する CDU/CSU と環境主義を貫く同盟90/緑の党との間で軋轢が生まれる可能性が高い。
③信号連立	同盟90/緑の党、FDP、SPD による連立。州議会での連立の経験があるが、その際も左派色が強い同盟90/緑の党と自由主義を重視する FDP との間で軋轢。
④黒黄連立	CDU/CSU と FDP による連立。産業界寄りの CDU/CSU と自由主義を重んじる FDP の親和性が高い反面、支持率では現状苦戦。FDP の主張が先鋭化する可能性も。
⑤黒黄赤連立	④の黒黄連立に SPD が合流するケース。議会の過半を得る公算が大きい。党勢回復が急務な SPD には苦渋の決断。SPD と FDP の間で対立が先鋭化する可能性も。

(出所) MURC 調査部作成

(3) 懸念される長期金利の上昇

支持率で二位につけている同盟90/緑の党は左派色が濃く、財政拡張志向が SPD 以上に強い。同盟90/緑の党は親 EU (欧州連合) であることから、EU の財政赤字ルール (対名目 GDP 比3%以内) に配慮しながらも、その枠内での財政拡張を目指していく公算が大きい。

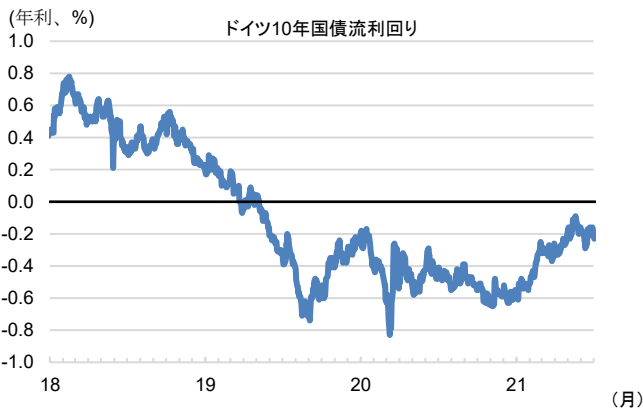
そのため、新内閣に同盟90/緑の党が参加すれば、現在安定して推移しているドイツの長期金利 (図表5) を押し上げる方向に働くと考えられる。欧州で最も信用力が高いドイツ国債の流通利回りが上昇すれば、連れ高という形で欧州各国の長期金利も上昇を余儀なくされる。このことで、国債保有比率が高いイタリアやスペインの銀行の財務に負荷が強まると警戒される。

現状では①の組み合わせが成立する公算は小さく、②か③の形で同盟90/緑の党は連立入りすると考えられる。②と③のいずれの場合も、同盟90/緑の党の強い財政拡張を反映し、長期金利は上昇すると見込まれる。さらに③の場合は、同盟/緑の党と FDP との間で対立が生じ、政権運営が停滞するリスクが意識されるため、この観点からも長期金利の上昇が促されることが考えられる。

④や⑤のパターンで新政権が成立する場合、CDU/CSU 及び SPD の責任政党としての長年の実績が投資家に好意的に評価されると期待されることから、長期金利への影響は軽微に留まろう。いずれにせよ、欧州中銀（ECB）のパンデミック緊急購入プログラム（PEPP）が出口に向かうと意識される中で、政治イベントが域内の金利を押し上げるリスクには留意したい。

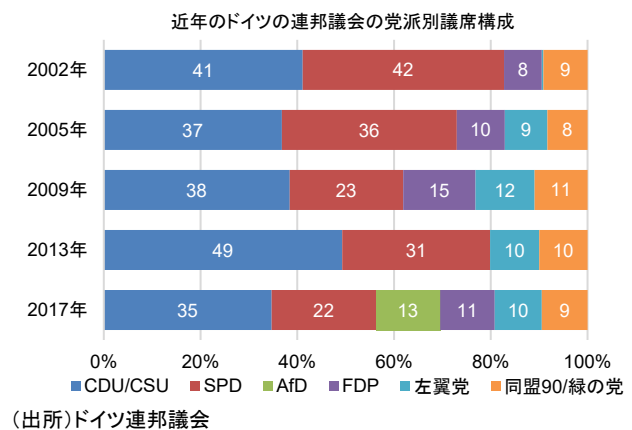
4期16年にわたるメルケル CDU/CSU 政権で安定してきたドイツ政治も、時代が下るごとに多党化の流れを余儀なくされてきた（図表6）。9月の総選挙ではその傾向がより明確な形で現出することになるだろう。またドイツ総選挙の結果は、2023年4～5月に予定されているフランスの大統領選及び直後の総選挙にも影響を与えると考えられる。

図表5. 安定して推移するドイツ金利



(注) 日次データ
(出所) ドイツ連銀

図表6. 徐々に多党化の傾向を見せるドイツ政治



(出所) ドイツ連邦議会

－ ご利用に際して －

- 本資料は、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一的な見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客様の決定、行為、及びその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客様ご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所：三菱UFJリサーチ&コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要ですので、当社までご連絡ください。